

竜山石採石場

竜山石は約 9,000 年前に形成されました。それは、マグマと冷水の突然の接触によって形成された微細なガラス状の破片の集合体であるハイアロクラスタイトであり、比較的柔らかいため、建設用途に長い間望まれてきた希少な材料です。この石は古墳時代（約 250～552 年）以降に竜山の採石場で採掘されたと考えられています。採石場は瀬戸内海に注ぐ加古川の河口近くにあり、出土した石材の輸送に最適な立地にあります。

この多用途の石は、最初は石棺に利用されました。740 年から 744 年にかけて、この石は当時の日本の首都、恭仁京（現在の京都府）にある皇居、恭仁京の礎石として選ばれました。

中世および近世（1185 ～1867 年）には、この石は塔、記念碑、仏像などの建造物に使用されました。現代では木造建築物の礎石や神社の墓標、道標、鳥居の材料として使用されています。竜山採石場から出土した最も有名なものは、神秘的な力を持つと信じられていた高砂の生石神社の巨石、石の宝殿です。

採石方法は、石の用途の変化を反映して、何世紀にもわたって適応されてきました。このため、この採石場は日本の採石技術の進化を理解する上で重要な場所となっています。現在は 3 つの竜山

石採石場が稼働しています。